

児童・生徒の部 「童話賞」

「忘れていた大切なコト」

浜松市立萩丘小学校

6年 奥村 実矢

私は肌寒さを感じて目がさめた。

目ざまし時計の針は午前6時、日にちは十二月二十五日。

今日は年に一度の最高の日、クリスマスだ。窓の外では、今年初めての雪が降っている。クリスマスにはお似合いの天気だ。

私はリビングに向かった。プレゼントは何だろうか。

リビングには大きなモミの木にかざりつけをしたクリスマスツリーが立っている。

私の自慢だ。

まだ家族は誰も起きていないようで、リビングはひっそりとしていた。

ぐるっと見たすと、ツリーの下に見えない箱が置いてある。

はっとする。

これはサンタさんから！

少し箱を振ってみる。

「くうーん」

鳴き声でした。もしかしたら生きてる？

私は急いで妹の空そらを起こしに行った。

私は歩あゆ。

十一才だ。

「空！空！早く起きて！サンタさんからのプレゼント、生きてるよ！」

空は目を見開いた。

「生きてる？」

私は空と急いでリビングへ戻った。がさこそと音がする。

「いい？開けるよ。」

私はふたを開けた。するとそこには子犬がいた。

「わんちゃん！」

私は子犬をだき上げた。

ふわふわしていてとてもやわらかい。

両親も下りてきて飼っていい事になった。

子犬の名前はクウ。

クウとの日々は最高だ。

驚く事、感動する事だらけだ。

私と空とクウは姉弟きょうだいみたいに仲良しだ。

ある日、私が学校から帰ると、クウがお母さんに歯みがきをしてもらっていた。

「えっ？お母さん、何してるの？」

「見れば分かるでしょ、歯みがきよ。」

お母さんはあたりまえという顔で言った。

「クウも歯みがきするの？」

私は新しいおもちゃで遊んでいるだけだと思っただ。

「そつよ。クウだって健康でいつまでも長生きしたいもの。おいしい物を食べるためにはやっぱり歯みがきしなきゃねえ。」

お母さんがクウの方を向く。

「ワン！」

クウがそうだよ！と言ったように聞こえた。クウはご飯を食べ終わるとはりきって自分の歯ブラシを持ってお母さんの所へ行っていい。

次の日私は、朝ご飯の後、歯みがきもしないで学校に行こうとした。

「歩、歯みがきは？」

お母さんに聞かれた。

「時間ないからやらない。」

私は言う。

「だめ。やってきなさい。」

お母さんはいつもこうだ。

何で歯みがき、歯みがきと言うのだろう。

「行ってきます！」

学校につくと、皆、歯ブラシを持っていた。そつだ。

今日は歯科検診の日だった。  
歯みがきしてない。

どうしよう！

順番を待っている間、とてもドキドキした。

私の前の女の子は先生に、

「歯みがき、丁寧にやっているんだね。とつてもきれいだね。」

とほめられてうれしそうだ。

「だって歯みがきは身だしなみの一つだもん。」

女の子は先生にそう言った。

私の番だ。

先生の前で口を開けると、

「あれ？歩ちゃん、歯みがきしてきたかな？」

先生は私の目をじっと見た。

私ははずかしくて、口を閉じてしまった。

今日はなんて嫌な日なんだろう。

家に帰ると、クウが出迎えてくれた。

クウを見てると、とてもいやされる。

「クウ、何でだろうね。」

私はクウに言った。

「何でみんな歯みがき、歯みがきって言うのかな。」

クウは私をじっと見た。

「歩ちゃん、僕が何で歯みがきするか知ってる？」

私は驚いた。

「僕、歩ちゃんや空ちゃんと長く一緒にいたいからだよ。歯があればいつまでも元気で笑っていられるし、おいしいものも食べられる。だから歯みがきするんだよ。」

クウは自信満々でおちついた声で言った。

「僕ね、本当は嫌いなんだよ、歯みがき。だけれどね、歩ちゃんと空ちゃんと一緒にいたい。もつともつとおいしいものを食べたい。そう思えるからがんばれるんだ。」

そこまで言うと、クウははずかしそうに目をふせた。

クウも歯みがき嫌だったんだ。

私は不思議な気持ちと、ポワツと温かくな

るようになれしい気持ちになった。

私もクウと空とお父さん、お母さんとおばあちゃんになってもずつと元気に笑っていたい。

おいしいものも食べたい。

そう思うとなんだか歯みがきをやりたくなくなってきた。

クウを見るといつの間にか私の歯ブラシをくわえてしっぽを振っていた。

「そうだね。やってみよっかな、歯みがき。」

私が苦笑いでいうと、クウはうれしそうにしっぽをもつと振った。